

段物 三太口説き

国の始まりや大和の国よ
身代三太の育ちを聞けば
人夫高取る御用人なれど
鴨の郡の金崎町よ

雨の降る日も風吹く夜も
三太使いしその駒こそは
鞍を申さば真鍮鞍よ

それに五色の手綱を付けて
坂は照れ照れ駿河は曇れ
云うて伏見を唄うて通る

伏見町なる代官様の
あれは何処の駒追いなさる
なれど家高武士の娘(こ)なれば
姫は七重の格子の内

そこで両親打ち驚いて
神にや誓願仏にや祈願
一向病気の平癒も無いで

両の親様お控えなされ
重い枕をようよう上げて
紙を選びて草木半紙

わしの病気にや薬は効かぬ
わしが死んだらその後こそは
三太説教二声三声

手向け給えよ両親様と
書いた書き置き髪にと挟み
後で両親嘆きが深い

例え卑しい駒追なりと
何を言っても皆後の事
伏見町より大工を呼んで

切りつ刻みつ棺こしらえる
四方の角にはツバメをはわせ
旗や天蓋、両立つ迄も

野辺の葬(おくり)もいと賑やかに
姫の七日に当たりし日こそ
三太馬子唄、字は法華経で

大和国では山崎三太
禁裏内裏(きんりだいり)の公家様内で
貧の病がよしな故に
小判千両で身売り沈む

駒の手綱で月日を送る
青の名馬で奥州小鹿毛
金と銀との金具を打ちて

鞍におゝばの荷を付けまして
あいの土山 のー 雨となれ
三太馬子唄焦がれし姫は

末の世をとる玉代の姫よ
声の良い程ご器量も良かる
門に走りて見ることならぬ

ふらりふらりの病にかかる
医者や薬は数知れぬ程
星の祭もしてみたけれど

或日姫様申せしことにや
下女の者たち下辺と下がれ
硯引き寄せ墨すり流し

鹿の蒔き筆墨含ませて
死なにや治らぬ恋路じや程に
千部万部の供養はいらぬ

三太馬子唄七声八声
想う恋路をさらさら書いて
姫はそのまま相果てました

さほど焦がれた三太であれば
末は何とか添わしようものに
これじゃなるまい取置きせんと

紫檀・黒檀・唐木を寄せて
棺は立棺(たてかん)神輿の造り
中の一羽は鳳凰孔雀

都合坊さん百人余り
やあれこれにて取置きすんだ
三太さんには京都の下り

八の巻をも崩して唄う

三太唄えば木かやも靡く
 羽交い休めて感ずる風情
 やあれ大和の三太が通る
 そこで家来が御門に走り
 三太さんとはお前のことか
 聞いて三太は不思議に思う
 伏見町なる代官様に
 されど伏見を通りしことで
 御門柱に駒繫ぎ止め
 ご免なされと御門を入り
 御用如何と相待ちおれば
 さても綺麗な前髪さんよ
 親の口から言いにく乍ら
 そなた馬子唄焦がれて死んだ
 そなた馬子唄二声三声
 駒の蹴上げの泥水なりと
 頼みや三太は気の毒そうに
 焦がれ死とは嗚呼おいとしい
 手には数珠掛け花籠持つて
 姫のお墓は何処と聞けば
 急ぎ程なくお墓に着いて
 一つ堀りては南無阿弥陀仏
 三つ堀りては説教語る
 棺の蓋をも取り去り見れば
 死んだ顔さえこうあるからは
 小野の小町か照手の姫か
 そこで三太の嘆きが深い
 姫の口にと一滴入れば
 死んだ姫君生き返り来る
 空を激しく飛び行く鳥も
 伏見代官それ聞くよりも
 こちへ呼べとの上意を下す
 やあれ待たんせ駒追いさんよ
 うちの代官御用でござる
 七つ八つから駒追いすれど
 無礼したような覚えも無いが
 寄らざるまい笑止のことと
 被る編み笠早や取り脱いで
 遙か下手に両手をついて
 伏見代官それ見るよりも
 駒を追うような人相でないが
 わしの世取りの玉代の姫は
 又も門前通りの時は
 そなた説教七声八声
 手向け下され のう 三太どの
 わしを見た様な駒追いふぜい
 それじゃこれよりお墓に参る
 折りて差すのはシキミの小枝
 遙か向こうの新小松原
 立ちた卒塔婆を鍬にとなして
 二つ堀りては馬子唄歌う
 姫の棺をば堀り上げまする
 中に姫君しんぼり御座る
 生きてこの世にありますなれば
 この世美人で千人まさり
 嘆く涙はあられか雨か
 それが奇跡か薬となりて
 千秋万歳まずこれ迄よ

身代(しんだい) || 身分・地位・暮らし向き
 取置き(とりおき) || 遺体の処置・埋葬のこと